

倉本 一平
長谷川周三
の
歴史レポート

本能寺の変 その6

長谷川周三 (瑞浪高校 1970 年卒) 著



2022 年 4 月

前回は、近衛前久（このえさきひさ）が、信長を京に誘き（おびき）出して殺害を企てていたことや、信長が日本の国王となって全土を支配し、その領土を我が子孫や親戚縁者に占領させる構想を練っていたところまでお話ししました。

今回は、前久が信長を京都に誘き寄せる為に関係者の元に奔走する様子と、信長の甲州征伐の帰路を中心にお話しします。

前久、今井宗久を訪ねる

天正 10 年（1582 年）4 月、京に帰った近衛前久は、信長を京に誘き（おびき）出す手立てを実行するために動き出しました。

まずは堺に馬を走らせて、今井宗久（いまいそうきゅう）を訪ねます。

宗久は堺の豪商であると共に、千利休、津田宗及（つだそうぎゅう）と並ぶ茶の湯の天下三宗匠と称された茶人です。

そこで前久は宗久に、信長の甲州征伐の戦勝祝いの茶会を、京や堺の茶人や公家衆を招いて開催したいので、その発起人になって貰えないかと持ちかけます。

宗久の商いは主に鉄砲の製造販売で、鉄砲に必要な火薬の原料（硝石）を独占的に買い占め、多くの鍛冶職人を雇って各部品を分業で作らせる方法を可能にし、高性能で安価な火縄銃の大量生産に成功しました。従来の南蛮人が持ち込んだ舶来品を見様見真似で作っていた鉄砲は性能が劣るため段々と買い手が少なくなり、宗久たち堺の商人への需要が増

大して来ました。

当時の信長は多くの鉄砲を宗久から買っていましたので、宗久からしてみれば信長は大のお得意様です。前久の願いに断る理由などありません。

一つ返事で承諾してくれた宗久に前久は「その茶会に日頃信長様が欲しがっている檜柴肩衝（ならばかたつき）を博多の豪商島井宗室に持って来させれば、信長殿が大変喜ぶでしょう」と、提案しました。



宗久は、それは名案だと賛同し、早速島井宗室にその旨を記した書状を送ることにしました。

結局この茶会は、発起人に今井宗久、津田宗及、千利休が名を連ね、茶頭には信長が茶の湯で最も親交を深めている千利休を充てることになりました。

信長のところには宗久が出向いて茶会を開催したい旨を申し込むこととなり、前久の信長を京に誘き出す手はずの一つが整いました。

前久、正親町天皇に拝謁



次に訪れたのは京都御所です。

その目的は正親町天皇に信長の甲州征伐に同行した報告と、天皇から甲州征伐の恩賞として信長に三職推任（注1）の勅命を下していただくためです。

正親町天皇に拝謁した前久は開口一番、天皇の友人である甲府の恵林寺住職、快川紹喜（かいせんじょうき）を信長が自分や明智光秀の必死な命乞いにも拘らず、容赦なく焼き

殺したことを涙して話しました。

正親町天皇は前久の話に身を乗り出して聞き入り、時には目頭を純白な小袖の裾で拭いながら蚊の鳴くような小声で「近衛よ、信長を早いとこ何とかしてくだされ」と、前久の涙で濡れた目をジーと見据えて諭しました。

前久が「信長を誅するには警備が厳しい安土城から警備の手薄な場所に誘い出して、隙を狙って襲撃するしか良い方法はなく、その為には信長を安土城から誘き（おびき）出す口実が必要です」と申し上げると、天皇はおもむろに口を開き「何か名案があるのか」と、尋ねられました。

前久は「帝（天皇）から信長に甲州征伐の恩賞だと言って三職推任の勅命を下していただければ、信長はその御礼に必ず上洛いたします。安土から京までの道中か、宿泊場所か隙を見て信長を・・・」と、意を決した面持ちで献言しました。

その後間もなく正親町天皇から三職推任の勅命が信長に下され、信長のところには、朝廷で武家伝奏の職に就いている公家の勸修寺晴豊が、勅使として行くことになりました。

前久、軍師黒田官兵衛に会う

残る課題は、総大将として毛利と戦っている羽柴秀吉の戦場に、信長を出向させるよう仕向けることです。

これを実現する為には、前久が秀吉に直接会って信長の出征を促すよう働きかける必要がありますが、前久が秀吉の戦場にわざわざ行くには、朝廷の用向きか、信長の使者として行くか、何かそれなりの理由が無くては秀吉が不可解に思います。

そこで思いついたのが、秀吉の軍師で以前から親交のあった、黒田官兵衛の存在です。

その官兵衛は、秀吉と共に備中高松城で毛利方の清水宗治と戦っていますが、時折食糧や武器の補給に、秀吉軍の最前線基地である姫路城へ出向いていました。

そしてその仕事が終わると決まって、かつて荒木村重の伊丹城に監禁（注2）された際に痛めた右足の針治療のために、有馬の湯宿「池の坊」まで足を延ばしていました。



黒田官兵衛



現代の有馬温泉

そのことを前久は、官兵衛の親戚筋に当たる姫路の廣峯神社の宮司から聞いていたので、その宮司に文を出して、官兵衛が姫路城にやって来た時は必ず知らせるよう頼んでいました。

そして4月下旬「官兵衛、来たる」との知らせを受けると、前久は鷹狩りの衣装で「池の坊」に向いました。

前久としては鷹狩りに来て泊まった宿で、官兵衛と偶然出会ったことにしたかったからです。

前久が逗留を始めてから3日目、ようやく官兵衛が「池の坊」にやってきました。

前久は、官兵衛に思いがけず会った振りをして挨拶をして、夕食に誘いました。

そこで強調したのは、甲州征伐で信長の嫡男信忠が信長から称賛され、多大な恩賞を受けた話です。

信忠は甲州征伐の総大将として武田軍の抵抗著しかった高遠城を陥落させ、その勢いで武田勝頼を自害にまで追い込みました。

信長はその功績に称賛して戦勝祝賀会では信忠一人を褒めちぎり、切り取った武田領の大半と、尾張・美濃の支配権までも譲り渡しました。

前久はそんな話を官兵衛に聞かせながら「毛利軍との戦いの総仕上げには必ず信長殿を戦地に招聘して、秀吉様や官兵衛様の働きぶりをその場で見て貰うのが肝心、そうすれば間違いなく信長殿は破格な恩賞を与えましょう」と、語気を強めて言いました。

官兵衛としては、今後、毛利軍の主力部隊5万と交戦するには信長の援軍は必要不可欠であり、少しでも早い機会に秀吉から信長へ出陣要請をして貰い、信長の承諾を得ておくことが必要だと思いました。

そして官兵衛は「近衛様、ご忠言確かに承りました。主人秀吉に伝えて信長様には頃合いを見て上申させていただく所存です」と、深々と頭を下げながら申し上げました。

これで前久の企んだ信長を安土から誘き出すための手はずは全て整いましたが、前久はもう一言官兵衛に言っておきたいことがありました。

それは信長が甲州からの帰路、自分は置いて行かれましたが、光秀や細川忠興、中川清秀、高山右近らを連れて富士山見物をしながら、家康領の駿河を通過して帰ったことです。

その話を聞いた官兵衛は、一瞬背筋が凍る思いをしました。

それは現在織田軍団の中で、秀吉が毛利と、柴田勝家が上杉と戦っている最中に、事も有ろうに信長が富士を見て家康領を物見遊山しながらに帰るとは、常識では考えられなかったからです。

残虐非道で虐殺を繰り返してきた信長が、また、どんな恐ろしい奇策を思いついたのか。

官兵衛は家康の顔を思い浮かべながら、秀吉の待つ備中高松城に帰って行きました。

信長、東海道を帰還

さて天正10年4月10日、安土への帰路に着いた信長一行の旅は、その後どうなったのでしょうか。

4月11日には本栖湖に陣を張り、12日には富士山を見物して浅間神社（富士宮市）で宿泊し、その後は江尻城（静岡市清水区）、田中城（藤枝市）、遠江の国懸川城（掛川市）に

宿泊し、そして16日には天竜川を越えて浜松城まで進んできました。

道中における家康の接待振りは、家康が莫大なる私財を投じただけあって相変わらず桁外れな豪華絢爛なものでした。



田中城



掛川城



浜松城

信長一行が行く先々の川には新しく橋が架けられ、街道の両側には柵を何重にも設けて警備の兵を隙間なく配置し、道中立ち寄った全ての城では到着した早々から酒宴が始められるよう、沿道の名酒や山海の珍味が用意してありました。

特に信長一行が家康の配慮に驚いたのは、天竜川に造られた大掛かりな船橋でした。

天竜川は街道切つての大河で、川幅が広く流れが速いため、容易に船橋を掛けることが出来ません。

そこで家康は領内にある船を多数掻き集め、屈強な家臣を集めて大綱数百本を張り、馬が容易に渡れるような強固な船橋を作り上げていました。

信長はこの行き過ぎとも思える気配りと接待に、終始機嫌よく振舞っていましたが、腹の底では「家康、農の企みを見抜きよったな」と思っていました。

今回信長が徳川領を帰路にしたのは、家康、穴山梅雪を攻落するために事前に城や地形などを調査することでした。

しかし、その目的は家康に早いうちに見抜かれてしまい、様々な妨害策を講じられたので、調査そのものは殆ど出来ませんでした。

それは家康が、信長らが立ち寄った城で手厚い接待攻勢を仕掛け、信長やその家臣が勝手に城の構造や堀の深さなどを調べる余裕を与えなかったことです。

また、信長一行の警護と見せかけて、街道の両側に背丈以上の柵を設け警備の兵を隙間なく置いたのも、好き勝手に領内の地形や川の深さなどを探索させないためでした。

さすがの信長も、家康の極めて綿密に練られた防衛体制には感心するほかありませんでしたが、一刻も早く討ち取らなければ、将来織田家は家康に乗っ取られるという思いが、強く込み上げて来ました。

翌日、信長と家康はそれぞれ別れて帰路に着きましたが、その別れ際に信長は「今回の接待誠に見事であった、感謝しておる。その返礼と言っては何じゃが、安土城に来て下され。歓待しますぞ」と家康に向かって持ち前の甲高い声で言い放ち、馬の背に片足を乗せながら悠々と帰って行きました。

孫子の兵法

さてこの時代、多くの戦国武将は乱世を生き抜くために、中国春秋戦国時代（紀元前 770 年～紀元前 221 年）に孫武が書いた孫子や、呉起が書いた呉子などの兵法書を学習していました。

特に孫子の兵法は合戦における戦術・戦略の書であったので、これを手本にして困難な敵に勝利し、生き延びた武将も多かったと思います。

その孫子の兵法の中に地形篇という章があります。

そこには戦いの前に戦場となる土地の地形や川の深さなどを知ることが、勝利に導く重要な要素であると説いています。

勿論、信長も前久も光秀も秀吉も官兵衛も、孫子の兵法は十分学習していたはずですが。

では何故信長は甲州征伐の帰路、敢えて家康に見透かされる行動を取ったのか。

それは信長が家康領に攻め入った場合、家康がどのように対処するか、試してみたかったからではないでしょうか。

しかし、信長の取った行動は、大胆不敵です。

一步間違えれば、家康に殺されていたかも知れないからです。

今回は、信長が明智光秀に家康殺しを命じ、前久が光秀に信長殺しを依頼する話を中心にお話ししたいと思いますので、よろしくお願いします。

(注 1) 三職推任： 関白、太政大臣、征夷大將軍のいずれかの官位を相手に選択させて授与すること。(今回の場合は信長)

(注 2) 伊丹城で監禁： 天正 6 年（1578 年）に官兵衛は、信長に反旗を翻し毛利方に就いた荒木村重を説得しようと、村重の居城伊丹城に乗り込みましたが、説得する間もなく捕えられ狭い土牢に監禁されました。